

仏女新聞

飯島可琳

東大寺ミュージアムを学芸員の永井洋之さんのお話をうかがいながらめぐりました。まだまだ気づいていない魅力がたくさんありそうです。

はじめに

東大寺ミュージアムが開館したのは 2011 年のことである。当時私は小学校 2 年生で、身長は 110 センチほどだった。かなり背伸びしないと展示が見えなかったが、それは私の身長が低いからであって、東大寺ミュージアムの展示位置が高いからだとは気づかなかった。永井洋之さんは言う。「平均身長の人々が仏像を見下ろさない高さになっています。」寺院のミュージアムならではの配慮である。

今私の身長は金堂鎮壇具の展示を上から見ることが出来る程度に伸びた。それでも仏像の目は私の目より高い位置にある。やや仰ぎ見る感じだ。

当然仏像の目の高さ以外にも、寺院のこだわりがある。たとえば背中丸みの印象的な弥勒仏坐像は、小柄な身体であるにもかかわらず、かなり大きなガラスケースにおさめられている。ケースの大きさには意味があるのだと永井さんは言う。お堂や厨子とは異なるが、ケース内の仏像は、その仏像にふさわしい空間とともに安置されているのである。時間をかけて行きつ戻りつしながら館内をめぐった。

千二百年以上前の光景が見える

ミュージアム中央のスペースに千手観音が安置され、その正面に誕生釈迦仏立像と灌仏盤が安置されている。東大寺仏生会（ぶっしょうえ）に登場するのは、ミュージアムの誕生釈迦仏立像のお身代わりである。誕生釈迦仏にかけける甘茶は「灌仏盤（かんぶつばん）」で受ける。本尊である大仏（盧舎那仏）がとてつもなく大きいためか、誕生釈迦仏も灌仏盤も一般的な大きさの数倍はあるようだ。そのため表情もよくわかる。穏やかな顔に見えるが、言い方を変えれば誕生したばかりとは思えない貫禄がある。誕生を祝う仏生会にふさわしい雰囲気ではないか。

永井さんによれば、誕生釈迦仏は男性二人で運び、灌仏盤は男性四人で支えるという。想像以上の重みは、仏像の存在感を示すものだろうか。灌仏盤の肌にはさまざまな文様が描かれる。おじいさんが鶴に乗ってとんだり雲が流れたり、じっくりと見れば楽しい模様がたくさん見つかる。正倉院宝物・漆胡瓶の模様に通ずるところがあるかも知れない。

仏生会の日、花御堂の中で微笑む誕生釈迦仏の姿は、東大寺創建の頃とどう違うのだろうか。私達が会おうの前と変わらない光景なのではないか。そう思うと次の 4 月 8 日が待ち遠しく



険しい表情をした神将の頭上に

平成二十八年五月二十一日から安置されているのは、青面金剛立像、聖観音立像そして十二神将立像十二体のうち六体である。現在は十二支で子・丑・寅・卯・辰・巳の神将が安置されている。身体の向きや手の上げ方をみると、十二神将が二体で一对として作られたことがよくわかる。

たとえば新薬師寺の十二神将には、干支を示す造形がない。時代を経て、東大寺ミュージアムの十二神将のように干支の造形が加えられた姿に変わっていく。安置されている六体の十二神将の中で、子と丑の神将は際立って険しい表情に見える。しかし、頭上に乗った子と丑の造形はとびきり柔らかい。本来大きく硬い身体であるはずの丑が、小さな兜から滑り落ちないように踏ん張っている。脚先をくねっと曲げている様子が愛らしい。神将の険しい表情と干支のかわいらしい姿勢が同時に視界に入る。そのギャップも魅力である。仏師の力量が目に見える。

永井さんはミュージアムグッズを作ることを検討しているらしい。是非、神将の上の「丑」を候補に入れて欲しいと思う。

おわりに

東大寺では奈良時代、平安時代、鎌倉時代、江戸時代とそれぞれの時代らしい様式でアップデートを繰り返してきた。東大寺ミュージアムも、平成時代のお堂として後世に残るに違いない。そんな長い時間を想像しながら見たい。（2016.11.25.）